

「憐れに思い走り寄り」（ルカによる福音書一五章一一〜三二節）

1 二人の息子をもつ父のたとえ

今日の箇所は、ルカ一五章のイエスの三つの譬え、その三つ目、聖書で最もよく知られている話の一つです。

この箇所全体の見出しとして、私どもの聖書には、「放蕩息子のたとえ」とあります。「放蕩」などという言葉は、いまやこの箇所のためだけに残っているような言葉ですが、新しい聖書（協会共同訳）では「いなくなった息子のたとえ」となっております。

ただ「放蕩息子のたとえ」にしても、「いなくなった息子のたとえ」にしても、当てはまるのは、二人の兄弟のうちの弟のほうであって、全体の半分、今日の箇所の前半しか言い当てていません。

そのことを考慮し「二人息子のたとえ」と呼ぶ人もいます。これだと全体をカバーできますが、ただ話の中心が、二人の息子にあるような感じを与えません。もちろんそれはそれで決して間違いではありませんけれど、本当の中心が見失われる恐れもないわけではありません。

イエスの話の語り出しに注意していただきたいと思えます。「ある人に息子が二人いた」（一一節）。この三番目のたとえは、本当は、二人の息子をもっていた「ある人」の話なのです。

この「ある人」。同じ言葉が、じつは「見失った羊」のたとえにも出ています。イエスは、こう語り出していました、「あなたがた中に、百匹の羊を持つている人がいて」（四節）。この中の、この「人」です。この「人」、今日の箇所では「ある人」、この「人」が話の中心です。そしてこの「人」とは、いうまでもなく神を指しています。要するにこの譬えの中心は「二人の息子」、すなわち、人間ではなくて、神なのです。神とは、どのような方なのか（一一〜二四節）、この神のもつて、人はどのようにならなければならないのか（二五〜三二節）、それをイエスはここで改めて譬えをもつて語っておられます。

パレスチナのかなり裕福な農家で実際あったことです。譬えというのは、一般に現実に起こったことを題材にしています。聞いている人が知っていなければ、譬えとして効果は薄いものとなります。

二人の息子のうち、下の息子、弟が、父が生きているうちに遺産を相続し、もらった財産をみなお金に換え、いわばアタッシュケースにつめこんで、家を出て、遠くに行ってしまったのです。

そして恐らく現実が起こったことは、その後何年かして、この息子がぼろぼろになって帰って来たということです。

そしてそのとき父は息子を叱責するどころか受け入れたのです。この父親の、良い意味でも悪い意味でも、寛容というか、甘さというか、それが人々の噂になった、話題になっていたので。兄貴が「怒った」（二八節参照）ことも事実でしょう。しかしそれも、人々は、今日のイエスの話とは違って、兄貴が怒るのはもつともだと考え

ていたのではないでしょうか。

しかしイエスにとつてこの出来事は、とくに、父親が、落ちぶれて帰ってきた息子を受け入れたことは、まことの神の行為と重なり、それを指し示す比喻となりうるものであります。

さてお金をもつて遠くに行ってしまった弟のその後はこう描かれています。

そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄使いしてしまった。何もかも使い果たしたとき、その地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べるにも困り始めた。それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやっつて豚の世話をさせた。彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物を与える人はだれもいなかった（一三〜一六節）。

こうして彼は、とうとう、当時ユダヤ人には最も汚れたと見られていた豚と暮らさざるをえなくなります。

「彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかった」。この言い方からすれば、豚の餌にまで手を出すことはしていなかったようです。しかし他方「食べ物をくれる人はだれもいなかった」わけですから、彼は盗んで生きていたと考えざるをえないのです（出エジ二〇・一五）。

そこまで落ちていったプロセスの意味は何でしょうか。その一つは彼の「所有」していたもの（お金）は、最後のところ、彼を助けなかったということではないでしょうか。彼はすべてを失います。お金も、裕福な農家の息子としての地位も、誉れ高い神の民であることも。

しかしこの息子には、本当に何も残っていなかったのでしょうか？ どん底で明らかになったのは、残っているものがあるということでした。それは父であり、父との関係、彼が父の子であることです。父とは神です。彼がすべてを失っても、彼が父の子であることは変わらない。神は彼を失わない。それゆえ、彼から、神は失われぬのです。彼は父を思い起こします。神を思い起こすのです。

2 愛の沈黙

さてこのどん底に落ちた弟息子、彼が父へと、神へと帰るプロセスを読む前に、考えておきたいことがあります。

それは、ここまで息子が落ちぶれるのを、どうしてこの父は黙って見ていたのだろうかということだ。

「お父さん、わたしが財産としていただく分を、いまください」と言い、さつさと換金して旅立ってしまう、この活動的な息子と対照的なのは、父親の沈黙です。今日の箇所では父がはじめて口を開いたのは、弟が帰ってきて、僕たちに、急いで一番良い服を持ってきなさいと命じたときでした。

家を離れようとする弟息子、父親は引き止めようとはしませんでした。これで永久に息子を失うかも知れないのに、この父は、息子の要求に従い財産を分けることで旅立ちに手を貸すことすらしていません。途中息子が苦勞しているのも、この父は風の便

りに聞いていたでしょう。でも、羊飼いのように捜しには行きません。銀貨をなくした女のように捜し回ることをしないのです。ここで相手は生き物ではない。ものでもない。人間なのです。神は人の帰りを待つのです。

どうしてこの父は、息子を行かせるのでしょうか。どうして行かせた上で待つのでしょうか。それは、敢えて言えば、この父は息子を愛しているからです。愛するとはどこまでも相手と共に生きようとすることです。それは好き嫌いのことではなくて意志です。それは相手があるがままに受け入れることから始まります。それによって生じる痛みも共にすることにおいて、耐えることにおいて、はじめて、その人と共に生きることになるからです。

息子は父から離れていきます。自由を謳歌します。しかしどん底に落ちて自由の實を食らいます。しかしそうした弟息子の放蕩の生活も神の沈黙の愛に保たれていたといつてよいのです。そのことのゆえに、神から離れた空しい生活の中で、彼の帰郷はすでにはじまっていたと言わなければなりません。

そこで彼は我に返って言った。「父のところには、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。ここをたち、父のところに行って言おう。「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください」と。そして、彼はそこをたち、父親のもとに言った。ところがまだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。息子は言った。「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません」。しかし、父親は僕たちに言った・・・(一七〇二二節)。

ここに、弟息子が、どん底の生活から、父なる神のもとへと帰るいきさつが書いてあります。しかし、帰るきっかけが、私どもが期待するような、あるいは理想としがちな、いわゆる「悔い改め」というものであったのか、疑問に感じるところがないわけではありません。

というのも、素直に読めば、我に返って、彼が第一に気づいた現実、自分はこので飢え死にしそうだということ、それと対照的に、父のところにいる大勢の雇い人にすら、有り余るほどのパンがあるということだったからです。食べ物のことで彼の頭は一杯なのです。それゆえ、父のところに行ったらこう言おうとして考えた言葉の最後に、リハールしてつぶやいた言葉の最後に「雇い人の一人にしてください」という言葉がくっついていたのです。パンにありつくためには、まずは神様にも、お父さんにも、罪を犯したと言わなければならぬ。そんな思いを、話のここの記述から読み取るのは少し意地悪でしょうか。

3 すべての人への招き

しかし、そのような思いが、たとえあったとしても、彼の帰郷への決心は変わりません。「ここをたとう」、この強い思いは変わらないのです。この背後に父の沈黙の

愛があります。その磁石に引つ張られて、彼は帰ってきます。

帰って来る息子を、最初に見つけたのは、父でした。旅立つ息子を黙って見送った父、その帰りを待つ父は、地平線の彼方にいつも目を向けて、その帰りを待っていたのです。

ぼろをまとい、裸足で、空腹のためかろうじて歩いていただけの息子、まだ遠く離れていたのに、父親は彼を見つけて、憐れに思い、走り寄って行きます。自分から走り寄っていくことは、父としての尊厳を傷つけかねない行為、軽々しい行動にも見えます。悪いのは息子のほうですから。しかし聖書の神は動かない神ではなく（出エジプト三・八）、走り寄っていく憐れみの神です。この神を私どもはイエス・キリストにおいて知ります。イエスは走り寄ってくださる神です。

帰ってこう言おうとしてリハーサルしていた言葉、彼は最後まで言うことはできませんでした。「雇い人の一人にしてください」が落ちていきます。父の腕の中で、そして「いちばん良い服を」という僕らに対する父の命令の言葉の背後で、かき消されてしまいました。その時しかし、息子は、自分が告白しようとしたことの意味をはじめて知ったはずです。聖書の悔い改めです。

「死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかった」。この父は、見失った羊を見つけた羊飼いと同じく、無くした銀貨を見つけた女と同じく、家族の中に戻った息子のために盛大な祝宴を催したのです。

さて私ども、この弟の兄のことに、触れないわけにはいきません。この譬えは二人の息子をもつ父のとえです。弟だけが父の子ではなく、この兄もまた父の子であり、弟の兄として、父の家族を、神の家族を、その中心を形成していることはいまでもないからです。

譬えのもとになっている現実の出来事が起こったときには、一般の人々は、兄に同情的だったろうと申し上げました。じつは、この譬えでも、父は、兄に対して理解を示しています。「怒って」家に入ろうとしない兄のところ、父は宴席を離れて出て来て「なだめた」とあるからです。

しかし説得には応じなかったようです。兄は、父を「お父さん」と呼びつつ「あなた」とも呼びます。まして弟を弟とは認めません。弟は兄にとって「あなたのあの息子」でしかないのです。「このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません」（二九節）という言葉には、父を恐れる、いわば奴隷のような感情が出ています。弟息子が、甘えに近い感情をいだいていたこととは対照的です。

この兄が示しているのが、ルカ一五章の三つのたとえが語られたフアリサイ派の人々や律法学者であることは、明らかです。ただ見失った羊のとえでも、無くした銀貨のとえでも、たとえの中で彼らを取り上げられることはありませんでした。今日のこの箇所、兄という一人の人物においてまとめて取り上げられています。ひと言で言えば、彼らにも、招きが語られているということ。徴税人も罪人も神に見いだされたことを、共に喜びなさいという招きです。喜びを共にすることはこの兄には簡単ではない。でも、神の喜びに、与るように招かれています。それに応じたかどうかは書いてありません。しかし彼も、そして私どもも、しがらみを捨てて神の招きに応じていきたいと願うものです。

（二二年五月一日）